

目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注 （一）

稲森，雅子
九州大学大学院人文科学研究院：助教

<https://doi.org/10.15017/4363586>

出版情報：中国文学論集. 49, pp.189-206, 2020-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）

稲森雅子

目加田誠博士（一九〇四〜九四、以下敬称略）は、北京留学（一九三三年十月〜三五年三月）から帰国後、第二次世界大戦終結までの間に二度中国大陸を旅した。時期は一九三六年十一月、四二年十一月〜十二月で、いずれも旅行時の日記ノートが、福岡県の大野城心のふるさと館に保管されている。このたび、目加田家ご遺族及び同館のご好意により、翻字による公開が許された。ここに深謝いたします。

一九三六年分は、大学ノート一冊で、表紙や裏表紙等に題記や署名などはない（中に原稿用箋五枚を挟む）。年次に関する記載は日記本文中にもないが、記述内容（行程、面会者等）に基づき、筆者が推定した。なお標題は、今般筆者が仮に付したものである。

一九四二年の日記は、大学ノート二冊で、表紙に『支那旅行日記／昭和十七年秋／中支／目加田誠』、『支那旅行日記／北支／昭和十七年十一月』と記す。戦時下にあった中国の実情が率直に、時として感傷的に綴られている。

翻字にあたり、体例は、九州大学中国文学会編『北平日記』（中国書店、二〇一九年）に倣う。漢字は現在の常用漢字体に改めた。仮名づかいは原文のままとした。また、句読点記号や書名の『』記号などは適宜筆者が補った。『北平日記』に注釈がある場合は該当箇所を記載し、注釈のない事項について適宜補う。注釈文中、目加田誠博士を「筆者」と称する。人名の「澤」「瀧」などはそのままとし、満洲は一部の引用などを除き「満洲」に統一した。

一九三六年の記録は、十月二十七日博多駅出発から、十二月二十四日大連出港まで二十八日間である。実際の旅行期間は、大連——下関間の三日を加え、満一ヶ月だったと思われる。ちなみに、外務省外交史料館の申請記録に

よれば、当初は八月中旬より約三週間の予定であった。^①目加田は後年「論文集のあとに」(『目加田誠著作集』第四卷、龍溪書舎、一九八五年)の中で次のように回想している(五一八〜五一九頁)。

九州にひとり来ているとあまりの寂寞に堪えないので、適当に理由をつくって翌年再び北京に出掛けた。この時はその頃の満州(今の中国東北地方)新京(現在の長春)に行き、親しい友達を訪ね、また羅振玉氏を訪問し、氏の旅順の邸に所蔵の楚の国から発掘された銅器を見せてもらう事の了解を得た……長春を出て奉天(現在の瀋陽)、大連、旅順、錦州、朝陽、承德をまわり、承德で熱河の離宮やラマ廟を見て二晩泊り、翌朝早くバスに乗り、ひる頃古北口を過ぎ、夕刻北京に入った。北京の城壁が暗がりの中で聳えているのを再び見て、私は胸をおどらせた。北京では、また錢稻孫さんのお宅に厄介になった……この旅の帰りは天津から船で大連に渡り、大連では柴田天馬さんにお会いし、船で門司に帰ってきた。

本稿は、福岡出発(十月二十七日)から新京到着まで(十一月一日)の記録と注釈である。

『北京旅行日記(一九三六年)』(出発〜奉天)

十月二十七日

午後七時三十五分 博多を出づ。駅頭、小牧夫人、渡辺、中山、山内、西本、久米、尾形、近藤、沢本、阿部、原義国、原寅次郎諸氏の見送りあり。^②同夜十時半、関釜連絡船^③にのる。夜半、船動揺せしが如きも、寝台に入りしため、殆ど覚えず。

十月二十八日

早朝、釜山につく。午前七時半、奉天行急行「のぞみ」^④に乗る。車中寒さを感じず。

車窓に見ゆる朝鮮の山々、美しく紅葉して、澄み切つたる蒼空に映えて心樂し。同日午後三時、京城につく。辛島・本多氏⁵出迎へらる。直ちに辛島氏宅に至り入浴、三人にて藤塚教授⁶を訪ふ。康熙刊本『顔李遺書』、其他李慈銘⁷の蔵書印あるもの等数点閲覽。因みに漢学者の著書に記せる○○○学の学字の義を尋ねしに、藤塚教授は故星野氏⁸の説を用ひ、矢張り謙遜の意也とせらる。宇野博士⁹の説と同じからず。同夜、歓迎会を催さる。藤塚、田中豊蔵¹⁰、辛島、本多諸氏。尚、近日北平に旅行せんとする森谷氏¹¹も会せらる。其後、京城の本屋を素見せしも何もなし。只、朝鮮本数点を見しのみ。此夜、辛島氏家に泊る。辛島氏と文学を論じて午前五時に及ぶ。文学を所謂血のじむが如きもの也とする氏の考へには完全に一致するも、予は氏の学が已に文学を超えて政治問題に深入りし、政治問題の記録を以てのみ生きたる文学となすが如きに賛成せざる也。論じ尽さざる所多きも遂に疲れて眠る。

十月二十九日

午前中、辛島氏と本多君のアパートを訪ね、共に秘苑¹²に至り、ついで大学の図書館に入り、奎章閣¹³より移せる書物等を見る。大学の研究室にて小憩。一旦辛島氏家に帰り、荷物を持ちて駅に向ふ。三時の「のぞみ」にて出立。藤塚教授、辛島 本多両氏見送り。

車中退屈して眠る。時々窓外を見れば、单调なる風景也。夕陽没する頃、山々に煙かゝりて鮮人部落寂しく白衣の人散見す。

安東にて税関検閲。何事もなければどうるさきもの。プラットホームに出でて、写真の証明をして貰ふ。月夜、安東の街静かに眠る。鴨緑江¹⁴を見ざりしは惜し。寝台に入り漸く眠り、目覚むれば已に奉天に近し。広漠たる満洲の野に朝日のぼりて赤く染め、烟に黒豚の走るを見る。

十月三十日

午前七時奉天着。思ひかけず新京の山本守君¹⁵出迎へられたり。君は奉天に所用もありてこゝまで来て、滞在中

行動を共にせんと云ふ。助かりたる気持也。駅を出で、自働車を雇ひ青葉町の中山氏を訪ふ。漸く探しあてゝ休憩。朝飯をすませ、先づ国立博物館を見る。博物館には、今支那刻絲、刺繡の展示会開催中也。刻絲のかゝるよきもの始めて見る（欄外自注「纂組英華」）。刻絲は、つまりつゞれ織の一種なれど、その精巧なるものは一見織物と信じがたき程なり。就中、朱克柔の牡丹の刻絲の如き、稀代の傑作あり。その他、陶磁器によきものあり。遼代の鶏冠壺はこゝにて始めて知るところ。汝窯のもの亦多し。銅器に立派なるもの又少なからず。羅振玉の捐助品、戴勝の飾りある銅器、実に素晴らし。其他、この博物館には、北魏、遼の墓誌石多く陳列さる。この拓本の一部は曾つて福岡にて見しもの也。

（博物館に於ては、特に河瀬松三氏の世話になりたり。又小平総治氏、前田莊三氏にも逢ふ）⁽²⁶⁾ 医大の黒田源治氏⁽²⁷⁾は出張中にて会へず。

博物館を出で、河瀬氏に伴はれ、大和ホテルグリルにて中食をなし、旧城内故宮に至る。故宮は今平生閉じて人に見せず。この日は特に前部を見る。美しき建築なれど、北京の故宮を見し目にては甚だ小規模也。シャーマン教の祭器（鉄の鍋など）こゝにもあり。文瀾閣の建物丈けのぞむ。四庫全書は今、図書館に移されたり。

河瀬氏と別れ、国立奉天図書館に至る。四庫全書、現にこゝにあり。この四庫全書の闕本は写本によりて補ひたり。この四庫全書についてはこゝに記さず。別に旧史料多く、今整理中也。善本として見るべきもの多からず。宋本は『自警編』のみ。只、こゝにて先日問題とせし『文獻通考』明内府本（経廠本）⁽³³⁾を見、その誤らざりしを認む。又、『四松堂集』あり。曹雪芹に関する重要な資料なり。

満人の著書多き故に或は『返志堂集』あるやと思ひしも無し。万曆己亥『李氏藏書』、『定庵先生年譜外紀』（嘉善張祖廉纂。娉鏡樓叢刻の内）。こゝを出で、山本君と城内にある本屋に行く。別に目新らしきものなし。日暮れ、城を出でて、商埠地に帰り、洞庭春といふ支那料理にて食事し、丸中ホテル（弥生町、中山氏の世話）⁽³⁸⁾に帰る。中山氏来り、一寸話して帰り、床に入る。

奉天は可成り寒さを覚ゆ。特に本日午後頃より急に温度下りしといふ。夜の街は北京の十二月初め頃の気候也。

されども奉天の街の立派さ、落付き、その気分は誠に気に入たり。

十月三十一日

午前中、満鉄図書館³⁹を訪ふ。司書植野武雄⁴⁰氏は出張中也。この人といひ、黒田氏と云ひ何れも出張中（黒田氏は日本）にて会へざりしは残念也。園田一亀⁴¹氏にあふ。図書館にて見たるもの。

風流天子伝四十回 齊東野人編

不経先生評

光緒二十一、香港書局石印⁴²

題詞 崇禎辛未朱明既望携李友人委蛇居士識於陶々館

同年清和月野主人涂書于虛白堂

宝卷⁴³

現世宝卷 上下

魚籃宝卷（民八、上海翼化堂刊）

賢孝宝卷

楊公宝卷（光三三）…之は殆ど歌ノミ

秀女宝卷（瑪瑙経房印造流伝）

如如宝卷

孟姜宝卷（翼化堂）

黄梅宝卷

真修宝卷

消災延寿宝卷

以上十種は宝卷。大体に於て彈詞及び小説多し。雲鍾雁全伝、合錦廻文伝、遺珠貫索（之ハ随筆ノ如キモノ）、五虎平西前伝、——南後伝、女仙外史、漢宋奇書、錦香亭⁴⁴伝。

目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）

南詞雅調文武香球 同治二年二酉堂主人編序

十二卷七十二回⁽⁴⁵⁾

後西廂記 道光辛卯鶴亭主人序

光緒甲午石印⁽⁴⁶⁾

琴城 湯世澱 鶴汀填詞

古埠 胡来照 鑑室評点

(藍閔宝卷 (韓湘宝卷) 宝卷
白氏宝卷 (雷峰古跡))

又

滿清稗史⁽⁴⁷⁾

勸戒録、近録、続録、三録⁽⁴⁸⁾

朝鮮本

皇明世説新語八卷⁽⁴⁹⁾

雲間 李紹文 節之甫撰

万曆庚戌 陸從平序

尚、左の二種は九州にも求めたきものなり

欽定四庫全書考証百卷 (武英殿聚珍版、道光十年修⁽⁵⁰⁾)

四庫全書原本提要 (摛文溯閣本)⁽⁵¹⁾

館長衛藤利夫氏⁽⁵²⁾にあひ、印刷物を貰つて館を出づ。之より奉天中学に至り瀧沢俊亮氏⁽⁵³⁾を訪ふ。松井秀吉⁽⁵⁴⁾は北京留学中なりと。先に博物館に行きし山本君を追ひ河瀬氏と共に中食。山本君と二人バスにて北陵に向ふ。郊外の広漠たる中に鬱たる松林あり。甚だ壮麗なる建築也。再びバスにて帰り、萩町に瀧沢氏を訪ひ、夕食を馳走

さる。瀧沢氏の蔵書に富む事羨む可し。青葉町の中山氏に挨拶に行きしもるす。ホテルに帰る。中山氏より電話、飛行機今は一週一度にて満員なりと云ふ。

十一月一日

午前八時半、山本君と共に奉天を立ち新京に向ふ。■⁽⁵⁵⁾■中、鉄嶺を通過す。此地は曾つて亡父の駐屯せしところ也。其他すべて車窓に見ゆる満洲の野は、何れも父の奮戦せし地に非ざるはなし。⁽⁵⁶⁾一種の感慨身に迫る。曠野草枯れて、極目すべて一様の褐色、■土の色なり。而も目の届く限り耕作されたるは驚異と云ふ可し。三頭或ハ四頭の馬に曳かれゆく農夫の馬車、枯木の梢の鵲の巢、皆従来満洲の絵に見馴れし処也。

午後三時半、新京着。茫茫たる平野に満洲国の国都新京は、日本の国力をつくして建設されつゝあり。坦々たる大路、所々に起る大建築、関東軍司令部、総務庁、其他の官衙、又新に開店せし百貨店あり。住宅街は、一様に灰色に塗られたる洋館にストーブの煙突林立して、已に煙をあげたり。樹木乏しく而も尽く落葉して目に青きもの一つなく、殺風景にして、大建築も小住宅も総て積木細工の家の如し。

山本君の家に落付き、夕食後、松浦嘉三郎氏⁽⁵⁷⁾を訪ふ。北京の中根太々も近頃新京に在りとき、訪れしも留守。水高の同窓江幡寛夫⁽⁵⁸⁾を訪ふ。文教部に於て教科書編纂に従事し、相当の地位に在り。明日再訪を約して帰る。冴えたる月中天にあり。夜風の冷気耳を切るが如し。山本君宅に泊る。

注

(1) アジア歴史資料センター (URL: <https://www.jacar.go.jp/>) 「目加田誠 九州帝大 支 昭和十一年六月」 Ref: B05015669800参照 (最終確認日=二〇二〇年九月十日)。

(2) 小牧夫人は、九州帝国大学ドイツ文学講座の教授小牧健夫(一八八二〜一九六〇)の夫人、山内は、同東洋史学講座の山内晋卿(一八六六〜一九四五)であると思われる。電子ブック『九州大学百年史』(URL: <https://www.lib.kyushu-u.>

- ac.jp/publications_kyushu/qu100th/ ウェブサイト『ジャパンナレッジ (JapanKnowledge Lib)』(URL: <https://japanknowledge.com/library/>) 参照 (最終確認日=二〇二〇年九月十日)。
- (3) 関釜連絡船は、下関(山陽線)——釜山(京釜線)釜山と京城(現在のソウル市)間の鉄道路)を結ぶ鉄道連絡船。一九二二年に三六〇〇トン級の大形船(景福丸、徳寿丸、昌慶丸)が就航していた。所要時間は昼間八時間、夜間九時間。『朝鮮旅行案内記』(朝鮮総督府鉄道局、一九三四年)、『朝鮮満洲旅の葉』(南満洲鉄道東京支社、一九三八年)ほか参照。
- (4) 釜山からソウル(京城)を経由して朝鮮半島を縦断し、南満洲鉄道の奉天(瀋陽)、新京(長春)まで走っていた国有鉄道。釜山——ソウル間は約四五〇キロメートル。
- (5) 辛島驍(一九〇三〜一九六七)は、東京帝国大学で筆者の一年先輩、一九二八年より京城帝国大学で教鞭を執っていた。住所は京城府三坂通。『北平日記』三九頁、注(115)参照。本多龍成は、東京帝国大学支那哲学科卒業。一九三五〜四〇年、京城帝国大学法文学部助教教授をつとめた。住所は京城内資洞。
- (6) 藤塚郷(一八七九〜一九四八)は、岩手県出身。東京帝国大学支那哲学科で星野恒(後ろの注(8)参照)に師事した。一九〇九年に第八高等学校講師(翌年教授昇任)となり、一九二二年七月〜二三年五月、中華民国に留学した。一九二六〜四〇年、京城帝国大学法文学部支那哲学科教授をつとめた。著書に『日鮮清の文化交流』、『論語総説』など。熱心な漢籍蒐集家で、京城の学者仲間から「書痴」と呼ばれた。李曉辰「京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚郷」(『文化交渉』第一号、関西大学大学院東アジア文化研究科、二〇一三年一月、二七五〜二八六頁)、「先学を語る——藤塚郷博士(含年譜・著述目録)」(『東方学』第六十九輯、東方学会、一九八五年一月、一六八〜一九四頁)参照。
- (7) 『顔李遺書』は、『顔習齋遺書』二十七巻と『李恕谷遺書』六十五巻から成る。日本国内の蔵書は光緒年間刊本(畿輔叢書)或はその影印本である。顔元(一六三五〜一七〇四、号は習齋)と弟子の李塏(一六五九〜一七三三)の著述を収める。顔元の学を李塏が継いだので「顔李学派」と称される。李慈銘(一八三〇〜九四)は『北平日記』三一頁、注(59)参照。
- (8) 星野恒(一八三九〜一九一七)は、新潟県出身。一八五九(安政六)年、江戸に出て、塩谷岩陰(一八〇九〜六七)

の学僕となり、宥陰の没後帰郷した。一八七五年に再び上京し、太政官修史館に出仕、重野安繹（一八二七～一九一〇）、久米邦武（一八三九～一九三二）とともに『大日本編年史』の編纂に従事し、一八八八年より文科大学教授を兼ね、一九〇六年帝国学士院会員となる。学風は考証を主んじた。著書に『竹内式部君事蹟』、『史学叢説』、『古文書類纂』などがある。

- (9) 宇野哲人（一八七五～一九七四）は、熊本県出身。東京帝国大学漢学科卒業。一九〇六～一〇年、清国、ドイツに留学した。東京高等師範学校教授などを経て、一九一九～三六年東京帝国大学教授。のち実践女子大学初代学長、東方文化学院初代院長、東方学会初代理事長・会長などを歴任した。西洋哲学の方法によって中国哲学を体系づけ、はじめて中国哲学の近代的研究法を確立した。著書に『支那文明記』、『二程子の哲学』、『支那哲学史——近世儒学』などがある。

- (10) 田中豊蔵（一八八八～一九四八）は、京都府出身。一九〇八年東京帝国大学支那文学科を卒業後、東洋美術史に転じ、慶応義塾大学文学部講師を経て一九二八年より京城帝国大学教授。戦後は、文部省美術研究所長、東京都美術館長をつとめた。著書は『東洋美術談叢』、『日本美術の研究』など（没後に刊行）。

- (11) 森谷克己（一九〇四～一九六四）は、岡山県出身。一九二七年三月に東京帝国大学法学部卒業し、同年六月京城帝国大学法学部助手となる（一九二九年助教昇任）。戦後は愛知大学、広島大学、岡山大学武蔵大学で教授を歴任した。著書に『支那社会経済史』、『東洋小文化史』などがある。

- (12) 昌徳宮の後方にある庭園で、別称は後苑。昌徳宮（約四十二万平方キロメートル）の六割を占め、朝鮮の造園芸術の粹を集めた自然豊かな庭園である。昌徳宮は、一四〇五年に李朝第三代太宗が離宮として創建し、一四六三年に第七代世祖が拡張した際、庭園も整備した。第十五代光海君から第二十七代純宗まで二九五年間、十三代にわたり、昌徳宮で政務が行われた。一九九七年、世界文化遺産登録。

- (13) 京城帝国大学は、日本統治時代の京城に設置されていた旧帝国大学。朝鮮総督府監督のもと、一九二四年に予科が開設された。一九二六年に法文・医の二学部、一九三八年に理工学部が設けられた。終戦により廃止されたが、一九四六年九月、ソウル大学校として再発足した。

- (14) 王立図書館に相当する機関として、一七七六年昌徳宮の敷地内に設立された。歴代王や王室の各種文書や記録、中国の文献、朝鮮の古文書などを收藏管理し、修復なども行った。一九二四年、京城帝国大学の創設に合わせて同大学の管轄となり、『老乞大諺解』、『朴通事諺解』などを影印した『奎章閣叢書』第一〜九(京城帝国大学法文学部編、一九三五〜四四年)が刊行された。終戦後、ソウル大学の管理を経て、現在は国立の独立機関となっている。
- (15) 現在の中華人民共和国丹東市で、朝鮮民主主義人民共和国との国境にある。当時は、満洲国に属していた。丹東駅は、ソウルから鉄路約五〇〇キロメートル、安東線(安東〜奉天、現在の瀋丹線、約二七〇キロメートル)の起点。安東駅では、日本、中華民国双方の税関による手荷物検査が行われ、旅行者は立ち会うことが求められていた。この地より、時刻は一時間遅くなる。
- (16) 中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国との国境の国境をなす朝鮮半島第一の大河。白頭山に水源を発し、西に流れて黄海に注ぐ。全長約七九〇キロメートル。
- (17) 新京は、現在の中華人民共和国吉林省長春市。満洲国の首都であった。
- (18) 山本守(一九〇六〜?)。『北平日記』七二頁、注(97)参照。北京留学中は頻繁に交流していた。
- (19) 満洲国立奉天博物館は、一九三二年六月開館。同年四月に奉天故宮博物館が閉鎖され、その管理を引き継いだ。收藏品の多くは遼寧省博物館に引き継がれた。大出尚子『満洲国「博物館事業の研究」(汲古叢書一一二、汲古書院、二〇一四年)参照。
- (20) 刻絲(緝絲)は、綴織(つづりわざ)と称される平織物の一種。単純な平織の組織を基本としながら、下絵に合わせてさまざまな色糸を緯糸として通すことで、絵画のように自由で豊かなデザインを表現できる。その歴史は古く、周代の毛糸で織られたものが発見されている。東京国立博物館東洋館ウェブサイト「中国の染織緝絲」(URL: https://www.tnm.jp/modules/_r_exhibition/index.php?controller=items&id=5184)参照(最終確認日二〇二〇年九月十日)。
- (21) 満洲国立博物館編『纂組英華』(座右宝刊行会、一九三五年)は、大判のカラー図録(帙寸法縦五六・〇×横四一・二×高さ一一・八センチメートル)二冊(上冊Ⅱ刻絲、下冊Ⅱ刺繡)と解説三冊(英語、中国語、日本語)から成る。一九三五年六月、新京に満洲国立博物館が開館したのを記念して出版された。「満洲国立博物館陳列品目録」(「満

蒙』第一六卷七号、滿蒙文化協会、一九三五年七月、一七三〜一八〇頁）参照。

- (22) 朱克柔は、南宋高宗（在位一一二七〜六二）の頃に活躍した女性工芸家。名は強、字は剛、華亭県（現在の上海松江）の人。人物、樹や花鳥などさまざまな素材をモチーフとした精細で清淡古雅な作風で知られ、絵画も善くした。筆者が鑑賞した牡丹刻絲は、「蓮塘乳鴨図」（上海博物館蔵）などとともに代表作の一つで、現在は遼寧省博物館に所蔵されている。

- (23) 遼の陶製の壺で、中国では皮囊壺という。遊牧民の革袋に似せ、高さ約三〇センチメートル、黄、緑、白などの単色の釉薬が施されている。当初は胴の丸いふくらした形であったが、次第に写実性を失い細長い形に変化した。

- (24) 汝窯は、北宋時代に河南省臨汝県にあったといわれている青磁の名窯。灰白色の素地に深い青緑色の青磁釉をかける。また、北宋の官窯の意味でも用いられる（汝官窯）。

- (25) 羅振玉（一八六六〜一九四〇）は、字は叔言、号は雪堂。浙江省上虞（現在の紹興市）の人。一八九一年、劉鶚（一八五七〜一九〇九）所有の亀甲獸骨文字の拓本を見て甲骨文字を研究し『殷虛書契考釈』を発表した。上海で東文学社を設立後、一九〇九年、京師大学堂農科大學監督就任。敦煌文献や明清時代檔案などを収集保全した。辛亥革命により、女婿の王国維（一八七七〜一九二七）とともに亡命し、京都に七年間滞在した。来日中は内藤湖南、狩野直喜らと交流し、『鳴沙石室佚書』、『流沙墜簡』、『鳴沙石室古籍叢残』などを出版した。帰国後は溥儀の家庭教師となり、満洲国参議府参議、日滿文化協会会長を歴任した。戴勝は、ヤツガシラ科の鳥。ユーラシア・アフリカに広く分布し、日本にはまれに渡来する。体は橙褐色で頭に扇状の冠羽がある。古来中国では平和、幸福、美の象徴とされている。

- (26) 河瀬松三（一九〇〇〜未詳）は、熊本県出身。満洲国文教部礼教社会教育科事務官として国立博物館の創設に尽力し、のちに満洲国立博物館総務科長をつとめた。小平総治（一八七六〜未詳）は、長野県出身。二松学舎、善隣書院で学ぶ。義和団事件の際は陸軍省通訳官として中国北部に従軍した。川島浪速の推薦で華北の警務学童監督となり、漢口東亜製粉会社、漢口領事館勤務を経て、一九一四年より十年間爾親王に仕え、事務の傍ら子女の訓育に従事した。満洲国建国の際、執政府内務官となる。その後、満洲国創設国立博物館主事に任じられ奉天に移った（当時は満洲国立博物館囑託）。没後、蔵書等は満鉄奉天図書館に寄贈された。前田莊三（生没年未詳）は、河瀬松三と同じく満洲国

文教部職員（満洲国立博物館嘱託）。『本館所蔵小平文庫目録』（南満洲鉄道奉天図書館、一九四二年）、安曇野市ウェブサイト「小平総治 安曇野ゆかりの先人たち」（URL: <https://www.city.azumino.nagano.jp/site/yukari/2193.html>）参照（最終確認日＝二〇二〇年九月十日）。

- (27) 黒田源次（一八八六～一九五七、日記本文は「治」と記す）は、旧姓有馬、熊本県出身。京都帝国大学文学部で心理学を専攻し、一九二四年同大学医学部副手となつて心理学を修め一九二三年文学博士授与。翌年文部省海外研究生としてドイツに留学し、一九二六年より満洲医科大学教授（生理学教室担当）。一九三一～三四年、再び欧米各国へ留学した。研究の傍ら、満洲国立博物館創設にも尽力した。戦後は国立博物館嘱託となり、一九五二年より奈良国立博物館長をつとめた。研究は、心理学、医学、薬学、支那学、考古学、美術史、日本古代史など多岐にわたる。著書は『芭蕉翁伝』、『西洋の影響を受けたる日本画』、『心理学の諸問題』、『条件反射論——意識生活の生理学的解釈』など。国立文化財機構東京文化財研究所ウェブサイト「黒田源次」（URL: <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukk0/8953.html>）参照（最終確認日＝二〇二〇年九月十日）。

- (28) ヤマトホテルは、南満洲鉄道株式会社が経営していた高級ホテルブランド。奉天ヤマトホテルは、駅の開業にあわせて駅に併設する形で開業した。一九二九年五月、奉天大広場（現在の中山広場）前に新館を開業、客室は七十一室、現在も遼寧賓館として営業している。浮田英彦「南満洲鉄道株式会社に見るホテル事業に関する基礎研究運輸部営業課の運営管理であった一九〇七年（明治四〇年）八月～一九二七年（昭和二年）十二月を中心として」（『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第十八号、二〇〇八年二月、一三三～一五〇頁）参照。

- (29) 瀋陽故宮は、後金時代の皇居。一六二五年に建てられたヌルハチとホントイジの皇居で、その後は離宮として用いられた。規模は、北京の故宮の十二分の一度程度。二〇〇四年、「北京と瀋陽の明・清王朝皇宮」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。現在は、瀋陽故宮博物院として一般公開されている。

- (30) 文溯閣、四庫全書は、『北平日記』三〇頁、注（53）参照。

- (31) 満洲国立奉天図書館は、一九三二年六月、文化政策の一環として、奉天宮殿旧蔵のた貴重記録や清代の文献を集めて、旧張学良邸（奉天市瀋陽区一心街四段十号）に開館した。館長は袁金鎧（一八六九～一九四七、奉天地方自治維

持会委員長)。蔵書は文溯閣四庫全書や盛京故宮殿版圖書などの漢籍を中心に二十万冊余りに達した。図書館では蔵書整理(一九三四年)のほか、契丹文字碑刻などの研究が行われた。『満洲国立奉天図書館圖書分類目録』第一〜四号(満洲国立奉天図書館、一九三六〜四二年)が編まれた。戦後、蔵書の殆どはソビエト連邦の接収を免れ、中国側に移管された。アジア歴史資料センター(URL: <https://www.jacar.go.jp/>)「奉天図書館事業報告 昭和九年五月」Ref: B05016060600) 参照(最終確認日=二〇二〇年九月十日)。

(32) 『自警編』九卷は、(南宋)趙善瑋の撰。趙善瑋(生没年未詳)は、字徳純、南海(現在の広東省仏山市)或は欽(現在の安徽省黄山市)の人。宋代の名臣や大儒の言行を集め、学問類、操修類、齊家類、接物類、出処類、事君類(上下)、政事類、拾遺類に分けて収録する。

(33) 『文獻通考』三四八卷は(元)馬端臨の撰。杜祐『通典』のあとを受けて、南宋の寧宗までの事跡や制度を記録した宋朝の制度に関する詳細かつ広汎な資料。経廠本は、明代の中央政府出版物の総称で、殆どは白色厚手の白棉紙に印刷された版心黒口の特別大型本である。経廠は、官庁の一つである司礼監に属する蔵版庫の名称。長澤規矩也『古書のはなし——書誌学入門——』(富山房、一九七六年)、高橋智『書誌学のすすめ』(東方選書四〇、東方書店、二〇一〇年)参照。

(34) 『四松堂集』五卷は、清朝の皇族愛新覺羅敦誠(一七三四〜九一)の詩集。愛新覺羅敦誠の字は敬亭、号は松堂、ヌルハチの第十二子アジゲの五世孫にあたる。兄の敦敏とともに、『紅樓夢』の作者とされる曹雪芹と親しく交わった。そのため、『四松堂集』は、曹雪芹研究において貴重な資料とされている。筆者はさきの留学中、中国語習得の一環として清朝の旗人奚待園から『紅樓夢』の個人教授を受けた。筆者の見た本は、嘉慶元年刊、一帙四冊である。

(35) 『通志堂集』二十卷は、納蘭性徳(一六五五〜八五)の遺稿をもとに編集出版された文集。納蘭性徳は、字は容若、号は楞伽山人、通志堂は室名である。名家イェヘ・ナラ氏の出身で、満洲八旗の正黄旗に属し、詞を善くした。納蘭性徳を『紅樓夢』の主人公賈宝玉のモデルとする説がある。筆者は留学中、納蘭性徳の詞集『飲水詞』を購入して読んだ。『北平日記』七四〜七五頁参照。

(36) 李贄『李氏蔵書』六八卷は、李贄(一五二七〜一六〇二)撰。李贄は、福建省泉州の人、号は卓吾。陽明学を修め、

童心説を唱えた。『李氏蔵書』は、戦国時代から元末までの人物を中心とした紀伝体の評論で、初版は万曆二十七年（己亥一五九九）年で、筆者が見た書も初版である。

- (37) 『定齋先生年譜外紀』二巻は、龔自珍（二七九二～一八四一）の年譜で、娟鏡樓叢刻は一九一五（民国四）年刊。筆者は留学中、龔自珍について研究した。『北平日記』三五頁の注（84）、一七四頁の注（91）、二〇九頁の注（112）参照。
- (38) 『日本都市大観——附滿洲国都市大観（昭和十一年版）』（大阪毎日新聞社、一九三六年）の奉天市の項を見ると、料理店の欄に「洞庭春」を、主要旅館欄に「丸中ホテル」を挙げる（九六一頁）。一方、一九二九年刊『南滿洲鉄道旅行案内』（南滿洲鉄道株式会社）には記載がなく、比較的新しいホテルであったと思われる。里見淳は志賀直哉とともに滿洲を旅し奉天を訪れた際、洞庭春で会食し「久振りで、支那料理もまたうまい」と綴っている（里見淳『滿支一見』（春陽堂、一九三二年、六二頁、一九三〇年一月九日）。
- (39) 滿鉄奉天図書館は、一九一〇年に開設された奉天図書館閲覧場に始まる。一九二〇年四月に奉天図書館として滿鉄本社地方部直属の参考図書館となり、一九二二年に正式に開館した。住所は奉天市秋町三番地。開館後、滿洲関係資料を中心に積極的な蒐集活動が行われ、大連に次ぐ規模の図書館となった。一九三五年二月より『収書月報』を發行（一九四三年九月）。戦後、蔵書は瀋陽市図書館に移管された。
- (40) 植野武雄（一八九七～一九四九）は、愛知県生まれ、号は竹城。陸軍中将植野徳太郎の長男。一九二〇年二月、東京帝国大学支那文学科選科修了。明治学院中学部、東亜同文書院図書館などを経て、一九二六年京城帝国大学法文学部助手となる。一九二九年四月、滿鉄大連図書館司書。翌年奉天図書館に移り、漢籍整理を担当した。一九四三年漢籍類の移送に伴い、大連図書館に転任した。戦後は、ソビエト連邦の接収に立会い、一九四七年二月に帰国し、関西大学講師をつとめた。著書に『滿洲地方志考』、『滿支典籍放』などがある。吾妻重二「植野武雄とその東洋学——附・著述目錄」（関西大学東西学術研究所紀要）第五一輯、関西大学東西学術研究所、二〇一八年四月、一五～五二頁）参照。
- (41) 園田一亀（一八九四～一九六二）は、熊本県出身。病気のため東京物理学校を中退後、滿洲に渡る。一九一六年奉天新聞社、一九二五年盛京新聞社を経て、一九三三年四月南滿洲鉄道に入社した。内藤湖南に指導を受け、『韃靼漂流記研究』（滿鉄奉天図書館叢書第二冊、一九三三年）を發表、研究成果十二篇を同叢書、滿洲学叢刊で報告した。一九

三八〇四二年は東京で研究し、『明代建州女直史研究』を東洋文庫に提出した(のち東洋文庫論叢として刊行)。その後奉天に戻り、奉天市立図書館長などをつとめた。一九四九年に東洋文庫司書となり、一九五六年七月京都大学より文学博士を授与された。園田一亀『韃靼漂流記』東洋文庫五三九(平凡社、一九九一年)、『東洋文庫八十年史』(東洋文庫、二〇〇七年)参照。

(42) 『絵図風流天子伝』四十回。底本は『新鐫全像通俗演義隋煬帝艷史』(通称『煬帝艷史』、『隋煬帝艷史』)八卷四十回、明人瑞堂刊、作者未詳、斉東野人編演、不経先生批評で、挿図が精巧とされる。煬帝を酒色に耽りつつ大事業を成し遂げた人物として批判的に生涯を描く。筆者が見たものと同じ石印本は、湖南図書館、紹興図書館などに所蔵されている。河野真人『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について(『中国文学論集』第二八輯、九州大学中国文学会、一九九九年、五一―六七頁)参照。

(43) 宝卷は、講唱文学に属する通俗な語り物。唐代の「俗講」、宋代の「説経」の流れを引く。韻文の間に散文を挟む構成が多い。内容は、仏典や仏教説話に取材したもの、道教や民間説話を潤色したものなど、さまざまである。古いテキストは現存せず、ほぼ清代以降のものである。一九二七年鄭振鐸が「仏曲叙録」(『中国文学研究』(下)小説月報第十七卷号外)、商務印書館、一九二七年)で紹介し、学界でも注目されるようになっていた。筆者が閲覧した宝卷は、鄭振鐸論文に著録されている(『賢孝宝卷』『黄梅宝卷』『消災宝卷』『白氏宝卷』は別系統と思われる書を著録。鄭論文所載書名を日記記載順に示す(○囲み数字は掲載頁))。『現世宝卷』⑮、『魚籃宝卷』④、『趙氏賢孝宝卷』⑩『楊公宝卷』⑯、『秀女宝卷』⑭、『如如宝卷』⑧、『孟姜仙女宝卷』⑤、『五祖黄梅宝卷』⑧、『真修宝卷』⑯、『消災延寿閻王經』⑥、『藍閨宝卷』⑫、『白蛇宝卷』⑫。澤田瑞穂『宝卷の研究(増補)』(国書刊行会、一九七五年)参照。

(44) 正題等は順に以下のとおり。(清) 関名撰『雲鍾雁三闌太平莊全伝』五十四回、(清) 李漁撰『合錦廻文伝』十六卷不分回、(清) 張純照撰『遺珠貫索』八卷、(清) 関名撰『五虎平西前伝』十四卷一百二十回、(清) 関名撰『五虎平南後伝』六卷四十二回、(清) 呂熊撰『女仙外史』一百回、(明) 羅漢中撰『漢宋奇書(即英雄譜)』六十卷、(清) 素庵主人編『錦香亭』四卷十六回。孫楷第『中国通俗小説書目 外二種』孫楷第文集(中華書局、二〇〇八年)参照。

(45) (清) 駕湖逸史撰『繡像文武香球』十二卷七十二回。

- (46) (清) 湯世澐撰『絵図後西廂記』四卷、(清) 湯世澐填詞、(清) 胡来照評点。
- (47) 陸保瑤『滿清稗史』十六種二十五卷、付二種三卷、上海新中国書局、一九一三年刊の排印本。『滿清興亡記』、『貧官汚吏伝』など十八種の在野の伝を集めたもの。
- (48) (清) 梁恭辰撰『勸戒録』、同『勸戒近録』六卷、同『勸戒統録』六卷、同『勸戒三録』六卷。
- (49) (明) 李紹文撰『皇明世説新語』八卷。(南朝宋) 劉義慶撰『世説新語』に倣って、德行、言語、文学など三十六門に分けて編まれた逸話集。朝鮮本は宮内庁書陵部に有する。
- (50) (清) 王太岳・曹錫宝撰『欽定四庫全書考証』百卷、乾隆四十七(一七八二)年勅撰。同光十(一八七二)年に修訂した。四庫全書に収録される三千五百余种のうち、約一千種の書籍について考証したもの。台湾の商務印書館、北京の書目文献出版社などから影印本が出版されている。
- (51) 金毓黻撰『四庫全書原本提要』(遼海書社、一九三五年)は、現在東京大学東洋文化研究所所蔵。別に『文溯閣四庫全書提要』(遼海書社、一九三五年。二〇一四年に中華書局影印)がある。著者の金毓黻(一八八七〜一九六二)は、字静庵、号静晤、遼寧省遼陽の人で漢軍旗人の家系に属する。一九一六年北京大学文科卒業。奉天省立第一中学教員から遼寧省政府に入り、省政府委員兼教育庁長官となる。満洲事変により軟禁され、数年間満洲国に出仕する。日本の文献調査を機に中国本土に亡命した。戦後は北京大学教授・中国科学院研究員となった。著書に『渤海国志長編』、『中国史学史』、『宋遼金史』などのほか一九二〇年から四十年間の『静晤室日記』(遼瀋書社、一九九三年、整理校点)がある。吾妻重二「内藤文庫所蔵の文溯閣四庫全書について——附『長澤文庫所蔵の文瀾閣四庫全書』」(関西大学東西学術研究所紀要)第五二輯、関西大学東西学術研究所、二〇一九年四月、一五〜四〇頁)参照。
- (52) 衛藤利夫(一八八三〜一九五三)は、熊本県出身、東京帝国大学文科大学選科卒業。一九一五年、東京帝国大学図書館司書となる。一九一九年、満鉄大連図書館に入り、翌年奉天へ移って図書館新設に参画した。一九二二年開館に伴い初代館長に就任し、積極的に活動したという。一九四二年に退職して帰国し、一九四六年より三年間、日本図書館協合理事長をつとめた。翻訳に『長崎より江戸まで』、『露国十六文豪集』など、著書に『図書分類ノ論理的原则』、『乾隆御製「盛京賦」に就いて』、『韃靼』などがある。第四代亜細亜大学学長などをつとめた国際政治学者の衛藤藩吉

- (一九二二〜二〇〇七)は四男。岡村敬二『遺された蔵書——満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』(阿研社、一九九四年)、小黒浩司『図書館をめぐる日中の近代 友好と対立のはざままで』(青弓社、二〇一六年)参照。
- (53) 瀧沢俊亮(一八九四〜一九七九)は、『北平日記』一九三頁、注(46)参照。
- (54) 松井秀吉(生年未詳)は、福岡高等学校を経て一九三〇年に東京帝国大学支那文学科を卒業した(筆者の一年後輩)。奉天第一中学校教諭となり、一九三六年夏より約一年間北京に留学した。『玉台新詠』の全訳を企画していたが、一九三七年十一月、大連駅で事故のため亡くなった。『中国文学月報』第十四、十六号(中国文学研究会、一九三六年四月)、松枝茂夫「訳者あとがき」『周作人随筆集』(改造社、一九三八年)、伊藤漱平「塩谷温博士の書き入れ本『中国小説史略』をめぐる』(『伊東漱平著作集』第五巻、汲古書院、二〇一〇年、八五〜一一六頁)参照。
- (55) インク染みにより判読不能。以下同。
- (56) 筆者の父目加田生五郎は陸軍中佐であったが、筆者が小学校六年生の頃に亡くなった。「父」(『目加田誠著作集』第八巻、龍溪書舎、一九八六年、二一九〜二二二頁)参照。
- (57) 松浦嘉三郎(一八九六〜一九四五)は、大阪府出身。一九二〇年、京都帝国大学支那史学専攻卒業。京都東山中学の教員を経て、一九二二年北京の順天時報に入社した。一九二九年、東方文化学院京都研究所発足に伴い研究員となる。一九三四年十月満洲国へ渡り、間もなく大同学院教授に就任した。高田時雄「陶湘蔵書購入始末」(『陶湘蔵書購入関連資料』東方学資料叢刊第十七冊、京都大学人文科学研究所東アジア人文情報学研究中心、二〇一〇年、一〜一七頁)参照。
- (58) 筆者が北京留学中、最初の一年弱下宿した中根家の夫人。さきの留学中親しかった。『北平日記』五九頁の注(25)参照。太々については、同六〇頁の注(35)参照。
- (59) 水高は、筆者の母校旧制水戸高等学校。江幡寛夫(生没年未詳)は、茨城県出身、東京帝国大学政治学科卒業。一九三三年当時、満洲国文教部編審官(大阪毎日新聞社編『現代日本人名録』毎日年鑑昭和九年別冊参照)。翌日、筆者は江幡宅に宿泊する。筆者は「友人は私に向かって『今この国は君達のような自由主義者が来るころではない。早く帰ったほうがよい』といった。そして自分は教育部で教科書編纂の仕事が続けているが、『どうしても本当に中国人

中国文学論集 第四十九号

を理解するには農村に入つていっしょに生活せねばならない」といつてやがて吉林の田舎に引き籠り、終戦になつてソ連人に殺された」と回想している（目加田誠『論文集のあとに』、『目加田誠著作集』第四卷、龍溪書舎、一九八五年、五一―八頁）。著書に『現代の国家』（社会書房、一九三一年）、『楊樹』（一九四一年）がある。